



てきすとぽい杯

VOL

4

<http://text-poi.net/>

目次

てきすとぼい杯について

てきすとぼい杯について

お題の挿絵

第4回 募集要項

第4回 審査結果

入賞作品紹介

《大賞》

「最後の地平線」 山田佳江 獲得☆ 4.400

《入賞》

「誰が助けるの？」 十市社 獲得☆ 4.286

「海と夜空と僕のハート」 犬子蓮木 獲得☆ 4.077

「不帰迷宮」 塩中吉里 獲得☆ 3.909

〈候補作品〉 ※得票順

「地下の迷路」 碧 獲得☆ 3.857

「姫君と五人の侍」 工藤伸一@ワサラー団 獲得☆ 3.769

「別荘にて」 廣川ヒロト 獲得☆ 3.714

「夜の底」 ひやとい 獲得☆ 3.600

「羽ばたく季節」 進常 椀富 獲得☆ 3.462

「四つの冠と太陽の印」 雨森 獲得☆ 3.400

〈つながった！で賞〉

「ピー Part3」 しゃん 獲得☆ 3.385

「大樹」 茶屋 獲得☆ 3.385

〈お前が主役で賞〉

「麦樹で乾杯」 太友 豪 獲得☆ 3.385

「神のお告げ」 山本アヒコ 獲得☆ 3.333

「戦いの始まり」 たきてあまひか 獲得☆ 3.286

「寒い四月の夜に」 ひこ・ひこたろう 獲得☆ 3.154

「古代から貴女へ」 げん@姐さん 獲得☆ 3.077

「選択」 ウツミ 獲得☆ 2.923

〈番外作品〉 ※投稿順

「雨女と晴れ男」 永坂暖日 獲得☆ 3.400 (制限時間後に投稿)

〈一時間が 120 分だったらよかったのに賞〉

「世界のはて」 住谷 ねこ 獲得☆ 4.077 (制限時間後に投稿)

「処方箋」 肉まん大王 獲得☆ 3.556 (制限時間後に投稿)

終わりに

終わりに

奥付



「てきすとぼい」とは

URL : <http://text-poi.net/>

Twitter : <http://twitter.com/textpoi>

てきすとぼいは、2012年2月より製作中の、競作・共作サイトです。

無計画書房に集うWEB作家の有志で開発を進めております。

先日ようやく、投稿・投票・感想・チャットなど最低限の機能が稼働いたしまして、2013年1月より てきすとぼい主催の競作イベント「てきすとぼい杯」を開始いたしました。



「てきすとぼい杯」とは

神様は七日間で世界を創造した。

僕らは一時間で物語を想造する。

てきすとぼい杯は、制限時間1時間+推敲15分で、お題に沿った小説を競作するイベントです。競作で作品が集まった後は、☆投票による審査、感想コメント、チャット会での意見交換や交流がセットになった、全体としては約一週間ほどのイベントになります。

第4回てきすとぼい杯

会場 : <http://text-poi.net/vote/11/>

お題 : 挿絵に合う小説を書いてください（挿絵は次ページで紹介）。

挿絵の位置を指定したい場合は、

本文中に [※ここに挿絵] と入れてください。

位置の希望がない場合は、入れなくても構いません。

投稿期間 : 2013年4月13日 22:30 ~ 同日 23:45

審査期間 : 2013年4月14日 0:00 ~ 2013年4月21日 24:00

挿絵をお題とするのは初の試みでしたが、過去最多となる21作品をお寄せいただきました。



(画：蟹川森子)

第4回募集要項

【投稿について】

投稿期間：

4月13日（土）22:30 ～ 同日 23:45

制限時間1時間の中に、お題に沿った小説を書いて投稿してください。

お題は、開始時間になりましたら、会場やてきすとぼい Twitter にて発表いたします。

会場：<http://text-poi.net/vote/11/>

てきすとぼい Twitter：<http://twitter.com/textpoi>

お題発表より1時間で執筆、その後15分で推敲&投稿してください。

締切は同日23:45頃になる予定です（お題発表時刻により、若干前後します）。

【審査について】

審査期間：

4月14日（日）0時 ～ 4月21日（日）24時

審査方法は☆5段階評価で、てきすとぼいのアカウントをお持ちの方ならどなたでも投票できます。個々の作品に感想ページもございますので、作品を読んで感じたこと、☆投票では表現しきれない評価など、ありましたらなんでも、お気軽にご記入ください。

票の集計方法：

☆評価の平均で、最も多くの☆を獲得した作品を「大賞」、以降3作品前後を「入賞」といたします。

※時間外に投稿された作品、お題を満たしていない作品も、投票や感想は同じように行えます。

ただ、結果発表の際に、集計対象からは外させていただくことをご了承ください。

第4回審査結果

【審査結果】 ※得票順、敬称略

1位 ☆ 4.400

「最後の地平線」 山田佳江

<http://text-poi.net/vote/11/14/>

投稿時刻: 2013.04.13 23:36

2位 ☆ 4.286

「誰が助けるの？」 十市社

<http://text-poi.net/vote/11/18/>

投稿時刻: 2013.04.13 23:44

3位 ☆ 4.077

「海と夜空と僕のハート」 犬子蓮木

<http://text-poi.net/vote/11/6/>

投稿時刻: 2013.04.13 23:26

(番外) ☆ 4.077

「世界のはて」 住谷 ねこ

<http://text-poi.net/vote/11/20/>

投稿時刻: 2013.04.14 00:45

4位 ☆ 3.909

「不帰迷宮」 塩中吉里

<http://text-poi.net/vote/11/7/>

投稿時刻: 2013.04.13 23:28 最終更新: 2013.04.13 23:34

5位 ☆ 3.857

「地下の迷路」 碧

<http://text-poi.net/vote/11/12/>

投稿時刻: 2013.04.13 23:30 最終更新: 2013.04.13 23:40

6位 ☆ 3.769

「姫君と五人の侍」 工藤伸一@ワサラー団

<http://text-poi.net/vote/11/17/>

投稿時刻: 2013.04.13 23:42

7位 ☆ 3.714

「別荘にて」 廣川ヒロト

<http://text-poi.net/vote/11/10/>

投稿時刻: 2013.04.13 23:30 最終更新: 2013.04.16 20:33

8位 ☆ 3.600

「夜の底」 ひやとい

<http://text-poi.net/vote/11/4/>

投稿時刻: 2013.04.13 23:23

(番外) ☆ 3.556

「処方箋」 肉まん大王

<http://text-poi.net/vote/11/21/>

投稿時刻: 2013.04.15 11:22 最終更新: 2013.04.15 14:16

9位 ☆ 3.462

「羽ばたく季節」 進常 椀富

<http://text-poi.net/vote/11/13/>

投稿時刻: 2013.04.13 23:35 最終更新: 2013.04.13 23:41

10位 ☆ 3.400

「四つの冠と太陽の印」 雨森

<http://text-poi.net/vote/11/16/>

投稿時刻: 2013.04.13 23:41 最終更新: 2013.04.13 23:46

(番外) ☆ 3.400

「雨女と晴れ男」 永坂暖日

<http://text-poi.net/vote/11/19/>

投稿時刻: 2013.04.14 00:08

11位 ☆ 3.385

「ピー Part3」 しゃん

<http://text-poi.net/vote/11/5/>

投稿時刻: 2013.04.13 23:25

12位 ☆ 3.385

「大樹」 茶屋

<http://text-poi.net/vote/11/2/>

投稿時刻: 2013.04.13 23:20

13位 ☆ 3.385

「麦樹で乾杯」 太友 豪

<http://text-poi.net/vote/11/15/>

投稿時刻: 2013.04.13 23:37

14位 ☆ 3.333

「神のお告げ」 山本アヒコ

<http://text-poi.net/vote/11/9/>

投稿時刻: 2013.04.13 23:30 最終更新: 2013.04.14 12:13

15位 ☆ 3.286

「戦いの始まり」 たきてあまひか

<http://text-poi.net/vote/11/8/>

投稿時刻: 2013.04.13 23:29 最終更新: 2013.04.13 23:44

16位 ☆ 3.154

「寒い四月の夜に」 ひこ・ひこたろう

<http://text-poi.net/vote/11/1/>

投稿時刻: 2013.04.13 23:08

17位 ☆ 3.077

「古代から貴女へ」 げん@姐さん

<http://text-poi.net/vote/11/11/>

投稿時刻: 2013.04.13 23:30 最終更新: 2013.04.13 23:44

18位 ☆ 2.923

「選択」 ウツミ

<http://text-poi.net/vote/11/3/>

投稿時刻: 2013.04.13 23:21

※投稿作品の再編集機能に不具合があり、いくつかの作品について審査期間中の再編集を可としました。
そのため最終更新時刻が制限時間以降となっている場合があります。

※獲得☆票の内訳につきましては、てきすとぼい杯の会場にてご確認ください。

会場 : <http://text-poi.net/vote/11/>

《大賞 1 作品》

獲得☆ 4.400

「最後の地平線」

著：山田佳江

<http://text-poi.net/vote/11/14/>

朝目覚めると、テーブルに置かれていた、一枚のサインペンの絵。
幼稚園に通う娘の落書きとばかり思っていた、その絵がやがて……。
じわりじわりと確実に進行してゆく恐怖を、淡々と描いた、
圧巻の完成度を持つ作品。☆ 4.400 は、過去 4 回を通して最高得点でした！

《入賞 3 作品》

獲得☆ 4.286

「誰が助けるの？」

著：十市社

<http://text-poi.net/vote/11/18/>

先生が、先生を辞める最後の日に。皆の前で黒板に描いた絵の、意味とは。
お題の絵に与えられた二種類の解釈が、先生と生徒たちの立場の違いを
くっきりと浮き彫りにする、一切の妥協のないシリアスな作品でした。

獲得☆ 4.077

「海と夜空と僕のハート」

著：犬子蓮木

<http://text-poi.net/vote/11/6/>

きらきらとした夜空の下、釣り人は今夜も、大きな川に糸を垂らしています。
その釣り人が、ずっと待ち望んでいる獲物とは……。？
せせらぎや魚の跳ねる水音が今にも聞こえてきそうな、大人も楽しめる童話作品でした。

獲得☆ 3.909

「不帰迷宮」

著：塩中吉里

<http://text-poi.net/vote/11/7/>

炎の指を持つ女「トーチ」と、同行の探索隊を出迎える、数々の危険と試練。
迷宮の最奥を目指す彼女らを待ち受けるものとは……。
即興小説とは思えないスケール感と、練られた描写が、高い評価を獲得しました。

《特別賞》

《つながった！で賞》

「ピー Part3」

著：しゃん

<http://text-poi.net/vote/11/5/>

第三回から、第4回を経て、第二回へ。連作が、見事に繋がった作品でした。

《お前が主役で賞》

「麦樹で乾杯」

著：太友 豪

<http://text-poi.net/vote/11/15/>

二人称の持つ、読み手に訴えかける力強さを活かした、印象深い作品でした。

《一時間が120分だったらよかったのに賞》

「世界のはて」

著：住谷 ねこ

<http://text-poi.net/vote/11/20/>

残念ながら制限時間後の投稿でしたが、☆ 4.077 という高評価を獲得しました。

――受賞された皆さま、おめでとうございます！
素晴らしい作品をありがとうございました。

(次のページから、作品が始まります。)

《大賞受賞作品》
最後の地平線
山田佳江



重い頭を抱えながらベッドを出て、キッチンに行くとテーブルの上に一枚の紙が置いてあった。グラスに水道水を注ぎ、一気に飲み干してからもう一度その紙を眺める。

「なんだこれ」

少しづつ目が覚めてくる。折り紙ほどの大きさの正方形の紙に、サインペンでなにかの絵が描かれている。

「木……？ いや、地図かな」

娘はもう、幼稚園に行ってしまったのだろう。妻は買物に行ったのだろう。壁掛け時計は午前九時を差していた。

その紙を冷蔵庫の壁面にマグネットで貼り付ける。おそらく娘が描いたものだろうと思い、特に気に留めなかった。

やかんに湯を沸かし、インスタントコーヒーを飲む。窓に陽が差し込む。久しぶりのいい天気だと思う。ふいに違和感に囚われる。ベランダには洗濯物が干されていない。ここ数日の雨に妻はうんざりしていた。なぜ洗濯をしていなかったのだろう。

コーヒーを飲んだコップを洗うために蛇口をひねる。カラカラと乾いた音が鳴る。水は出てこない。

「断水かな」

シンクにコップを置いたところで、ふと冷蔵庫に貼られた絵に目が止まる。

「あれ？」

さっきとなにかが違っている気がする。だけど思い出せない。地図のような、枝のような線の先端に、五つの記号が記されていないなかったらどうか。

「星、月、これは……太陽かな。それにハートマーク」

あと一つ、そこになにかが描かれていたのかが思い出せない。

洗面所の蛇口からも水は出なかった。諦めてまた台所に戻る。

室内が暗くなる。何かかと思い窓辺に行く。外はまるで深夜のように暗い。部屋の電気を点けて壁掛け時計を見る。時計の針は九時半を知らせている。午前九時半のはずだ。

「なにが起こってるんだ」

わけが分からない。何気なく冷蔵庫に貼られた絵を見る。枝分かれした線と、三つの記号。

「三つ？」

その紙に記されているのは、星と月とハートマーク。さっき見た時より、確実に一つ減っている。

「そもそも今日は何月何日だ。俺は今日、なぜ家にいるんだ。仕事はどうしたんだ」

リビングに貼られたカレンダーを見に行く。月の表示が消えている。窓の外に煌めいていた星が、全て消失したような気がした。慌てて冷蔵庫の前に行く。図形はあと一つ。ハートのマーク。

しばらくして、最後の一つのマークも消えた。なにかが変わったようには思えない。今、なにが起こっているのか分からない。だれかに連絡をしなければ。だけどだれに？ 携帯電話を手に取り、それを呆然と眺める。助けを求めるべき人を一人も思い浮かべられない。

だれか。

だれか。

枝が一本ずつ消えていく。

そして、最後の地平線も。

《入賞作品》
誰が助けるの？
十市社



黒板にへんてこな図を書きながって、先生は振り向いた。

「ここにとても大きな木があります。大きな木には五人の人たちがそれぞれ太い枝の上に家を作って、家族と一緒に住んでいます。ある日、イガグリさんが足を滑らせてしまい、枝のてっぺんからゴロゴロと転げ落ちてきました。気づいたほかの四人はそれはそれは大慌て。さあ、誰がイガグリさんの転落を阻止することができるでしょうか」

ぼくたちは知っていた。

先生が怒っていることを。

それもただ怒っているだけじゃなくて、今年でもう先生の仕事を辞めてしまおうと思っているのだ。

だから、先生はもうどうでもよくなって、こんなふうに分けのわからない問題でぼくたちを混乱させて楽しんでいるんだ。

「先生、イガグリさんって誰ですか？」

先生はため息をつく。「右から二番目の枝に住んでいる人です。見ればわかるでしょう」

「はい」きまじめな女の子が手を上げた。「じゃあ、水の人だと思います。一番近くに住んでるし、最初に気づくと思うから」

「水の人？」先生の目つきが鋭くなる。「それは誰のことですか」

「え、まんなかの……」

「タマネギさんをそんなふうと呼ぶのは許しません」

「じゃあ、タマネギさん……だと思います」

「タマネギさんは軍手をしていないのに？ イガグリさんのトゲトゲの体を素手で受け止められるとでも？」

「じゃあミカツキさん」別の女の子が答える。「ミカツキさんなら軍手をとって戻ってくる時間があったと思います」

「カキノタネさんのことを言ってるのかしら？ だとしたらハズレね。カキノタネさんは出っ張った顎が邪魔をして足元に転がっているものを見ることができないんですよ」

「ハート！」のんびり屋の男の子がのんきに声を上げた。「ハートは優しいから助けたあげたんだよ」

先生は首を振って却下する。「モモジリじいさんは近所で評判のイジワルじいんです」

「じゃあもう、一番左のホシの人しかいないじゃん」

「残念。スターフルーツさんは前日お星様になりました」

答えは出つくし、ぼくたちはお手上げで先生を見上げた。

そのとき、ぼくは思いついた。

「わかった！ イガグリさんは自分で止まったんだ！ 誰にも助けてもらわなければならないんだよ！」

先生は今までで一番みにくいものを見る目でぼくを見た。

「さようなら、みんな。今日でお別れですが、元気で暮らさない」

それだけ言うと、先生は教室を出ていこうとした。

「先生、正解は？」

みんなが不満の声を上げると、扉を開けた先生はぼくたちを振り返った。

「正解は、『誰も助けられませんでした』です。みんなが先生を助けてくれなかったみたいだね。イガグリさんは足を滑らせてすぐ、枝から落ちて地面に激突していたんですよ。あなたたちの担任になって二ヶ月で先生が精神を病んでしまったのと同じように。ほんとにひどい一年でした。地面に激突したまま半年以上あなたたちの面倒を見なければいけなかったのですから。さようなら、みんな。その絵を一生忘れずに覚えておくがいいわ」

《入賞作品》
海と夜空と僕のハート
犬子蓮木

僕は釣り人。いつもこのおおきく広がった川で夜釣りをしている。

だけど釣っているのは魚じゃない。

空にはきらきと星々が輝いている。流れ星もきらきとよく降りそそぐ。世界は静かで、座ってのんびりしている僕の歌が川のせせらぎと一緒に響いている。僕はたまに竿をゆすって、川の波紋をリズムに歌をうたう。

浮きが沈んだので竿をひいた。重くはない小物のようだ。水面からだすときだけ一瞬の抵抗、星屑がしぶきを散らしながら糸のさきにぶらさがっている。

そう。ここでは星がつれるんだ。



この川の上流にはいろいろな里がある。

星の里、三日月の里、雫の里、太陽の里、心の里。

この川はそんな里々のちいさな川が合流してできた川で、その里から流れてくるいろいろなものが釣れるんだ。

僕は下流にある砂の国の住人で、そんな里にはいったことがない。だからどんな人たちが住んでるんだろうなーって想像しながら釣りをしている。

僕の目当ては、心の里から流れてくる。おおきなハートだった。

ずっと昔に誰かがそれを釣ったという伝説が僕の住む砂の国には残っている。ピンク色だとか赤いとか

でとてもおおきなおおきなハートらしい。

それがあれば、いろんな人をなかよしにして、ケンカをとめたり、戦争をとめたりできるんだって。僕は大好きな人にハートをプレゼントしてなかよしになりたかった。だからおっきなハートを探しているんだ。

それに、星屑とかもいいお小遣いになるしね。

また竿がひいた。

こんどはけっこう強いひき。水の中なのに輝いている。

太陽だ！

太陽は水の中でも太陽は負けじと輝いている。周りの水を蒸発させるから水の抵抗は少ないはずなのに、たんじゅんに太陽は他のものよりも重いらしい。比重ってやつだ。

僕は負けないように立ち上がると竿のなかほどを左手でささえた。別に太陽はそんなにいらんないけれど、この重さはきっとハートを釣るときの練習になるだろうと思った。それに太陽は薬になるから特に高く買って貰える。だけど、

「あっ」

糸が切れてしまった。けっこう使い続けていたから寿命もあったかな。

流れていった太陽のことを思う。ここは河口付近で、もうすぐ海になるところだった。太陽が流れて、他にも星や月が流されて、そんな海がきっと今、僕の上に広がる星空のようになるのだと思う。

僕はハートが手に入ったら、大好きな人と海にいきたかった。星空にはハートは浮かんでいないから、海の空にハートを浮かべたらきっと綺麗だろうなって。

そうして、たくさんの雫を流れ星にして遊ぶんだ。

糸と浮きやそして獲物をくっつけるための取り餅を新しくつけた。

こんどこそハートを釣るんだ。

竿をふって、取り餅をとばす。シュルルルーって、流れ星みたいに飛んで行って、ぽちゃん、と水にもぐった。浮きが波紋を響かせながら、僕はまた夜の釣りを始める。

歌詞のない歌をうたう。きまりきった歌じゃないけれど、いつも同じリズムなのはきっと川の音がベースになっているから。

ぼーとながめていると眠くなる。いつのまにか歌がやんでいるとちょっと寝ていたんだなってわかる。そろそろ時間だから、帰ろうかなと思った。つれないのいつものことだし、また明日があるさって。

だけど僕は感じたんだ。

心臓の鼓動を。それは僕のドキドキした気持ちだけじゃなくて、竿の先、糸の先、浮きのした取り餅に今、ハートがくっついたって。

感覚よりも遅れて浮きが沈んだ。僕の意識が集中していくのがわかる。

糸が切れないようにゆっくりと立ち上がる。太陽よりは重くない。だけど、不規則に動いているような不思議な感じ。

オチツケよもう。

僕は自分とハートに言い聞かせるように思った。そんな言葉とは裏腹に僕もハートもどんどんドキドキしていく。まるで僕の気持ちが向こうで高鳴っているみたいに。

竿を操って、ハートが少しずつ河原に近づくようにした。流れに逆らうのはたぶん良くない。どうすればいいかなんとなくわかる。

長期戦になりそうだ。焦ってはまた糸が切れてしまう。

もう少し、あと少し。僕は川のながれに乗るように、同じような速度で河原をあるいてくだった。

ドキドキ。

水からあげるのは最後でいい。

ドキドキ。

ハートってやっぱり綺麗なんだろうな。

ドキドキ。

あっ。淡いピンク色の光が見えた。

あれがハート。

そのとき、大きな魚が跳ねた。

僕よりもはるかに大きい。びっくりしたけど竿をはなしてはいない。ただ、その魚が僕が釣るはずだったハートを食べてしまった。

糸が切れる。僕は脱力してへたりこんでしまった。はは、って笑うことしかできない。

「なんだよもう！」

僕は河原に体を投げ出して寝そべった。

夜の空には星も月も流れ星もある。太陽だって、あの星々をどこかから照らしているんだろう。

だけど、ハートも魚もそこにはいなかった。

僕はそんな海の空にきっとハートを浮かべてみせるんだ。

<了>

投稿時刻 : 2013.04.13 23:28

最終更新 : 2013.04.13 23:34

獲得☆ 3.909

《入賞作品》
不帰迷宮
塩中吉里

闇の血が滴る地下迷宮に潜って早三日。女は一人暗闇の中を進んでいる。

四日前、女はまだ外の世界にいた。三日前、女は炎の指を持っているという理由で、借金の形にこの迷宮へと送りこまれた。二日前、女と同じく迷宮の奥を目指していた探索隊は、残らずいなくなってしまった。

暗闇の中にあっては死ぬまで燃え続ける赤熱の指は重宝されるのだという。彼女はトーチという呼び名をつけられて、両脇を護衛に固められ、先の見えぬ迷宮の先導を強制されていた。探索隊の人数は総勢百名弱。大隊を編制していたものの、初日の、迷宮浅部で突如としてあぎとをひらいた地割れに半数を呑みこまれたのを皮切りに、影の魔物や、またぞろ地下へと続く奈落の穴が、勇敢な救国の勇者たちを帰らぬものと変えてしまった。女の現状のきっかけは、国王の無慈悲な号令にさかのぼる。

曇天の晴れぬ空がもうずっと続いている。太陽の失われたこの国に、もう一度光を取り戻すのが汝ら探索隊の使命である――。

太陽は迷宮の奥底に封されている。国一番の占者が予言したたった一枚の凶案のために、国中の屈強な男たちが集められた。それこそはこの国に古来より秘されてきた不帰の地下迷宮の地図。最奥に、双子の太陽の片割れがいる。女はたった一人になってしまった今でも、迷宮の最奥を目指しているのだった。



女は指先の炎が消えかかっていることを知っていた。炎が消えた時、女は死ぬだろう。食料はほとんど尽きかけている。飢えと渇きが張り付いた体は、ともすれば正しい道順を忘れそうになる。間違えてはならぬ。最初の別れ道を右、次を左、次を右、最後にまた右に行けば、太陽は女を迎えてくれるはずなのだ。そして、女は既に三つの別れ道を越えてきた。女の炎の指を守ろうとして屍と成り果てた男たちを置き去りにして、とうとうここまでやってきたのだ。男たちの断末魔は、幻聴のように女にまとわりついた。皆口をそろえて必ず言った、おれの代わりに太陽を手に入れてくれと。

——そのとき、小さな水の音が聞こえた。

女ははっと身じろぎした。力の入らない腕を叱咤して指を前方に掲げた。暗く深い迷宮の最後の別れ道がそこにはあった。水音は、どうやら女から見て左の道から聞こえてくる。喉の奥からよだれがあふれてくる。女は唾を飲んだ。同時に、左の道から聞こえてくる水音も大きくなる。

女の足は、ふらふらと左に吸い寄せられていった。果たして数刻の後、女の指は迷宮に不似合いな穏やかな水場を照らし出していた。乾ききっていた女は、狂喜して水場に飛び込んだ。喉を鳴らして水を飲みこんだ瞬間、女の体は迷宮の壁面に引きずりこまれた。最期の瞬間、女は喉の奥に違和感を覚えていた。

まるで自分を呑みこんだみたいだ。

地下の迷路

碧

窓際の、前から3番目の机で、いつも突っ伏してる。一度も染めたことのない黒い髪は長い。別にそういうファッションなんじゃなくて、あまり頻繁に床屋に行かないだけ。その証拠に、後頭部の毛がびよんびよんみっともなく跳ねている。見てくれに気を使わない、表情もいつもぬぼーっとしていて、喋り方もしまりが無い。羽村聡史はそんなやつ。つるんでる男子はいないし、女子は、クラスの殆どが気持ち悪がってる。羽村聡史はそんなやつ。

チャイムが鳴って、一日の全ての授業が終わった。同級生達のおしゃべりが始まって、クラス中が騒々しくなる。もっさりした動きで、窓際の前から3番目の男子生徒は立ちあがった。誰も話しかけたりしない、だけど何人かがちらりと視線を送っている。黒板の前を通り過ぎたとき、誰か男子生徒の一人が、わざと彼の行く先に足を突き出した。躓く。床に倒れこむ。ばさあ、という音がした。多分、鞆の中身が広がったのだ。鞆をちゃんと閉じていなかったに違いない。羽村聡史はそんなやつだから。クラス中が一瞬静まり返る中、くすくす、と、一部の女子がそれを笑う声が出た。羽村聡史はそれに構わず、緩慢な動きで床に散らばった教科書やプリントや筆記具を拾い集めている。横顔には、怒りも、悲しさも、特に目立った感情が表れていない。無表情。それがよけいにムカつく、気持ち悪い、などと影で言われたりしている。羽村聡史はそんなやつ。

いつからそうなったのかははっきりしていない。高校に入ったばかりの頃は既に無口だったが、去年はまだ話し相手ぐらいはいた。中学時代も大人しい生徒、というポジションではあったが、友達は何人かいた。理科が得意だった。公立高校の理数科に行きたいと言っていたことがあったが、結局落ちた。英語がとても不得意だった。リーディングの授業で当てられると、とてもしどろもどろにカタカナ英語を読み上げる。下手糞な英語を披露しながら、恥ずかしがるような表情を見せることはない。ふてぶてしい、と英語の教師に罵られたことがある。羽村聡史はそんなやつだった。

小学校の頃は、もう少し明るかった。友達も何人かいた。快活というほどではなかった。やっぱり理科が好きだった。夏休みの自由研究ではよく虫の観察レポートを提出していた。3年生の時だ。画用紙にこんな絵を書いてきていた。



色んなスケッチやデータは集められるが、まとめるのが下手なのが羽村聡史だった。この絵一枚が彼のその年の自由研究のレポートだった。それを見て思わず、これはどういうことなのかと尋ねた。

「蟻の巣のスケッチだよ」

と彼は答えた。2枚のガラスの板の間に土を入れ、そこに蟻を何匹か放り込んで、巣を作らせ、それをスケッチしたのだと。

「この星とか太陽とかは？」

と更に尋ねると、

「蟻は、それぞれの穴に運び込んだお宝をしまっているんだよ」

と返ってきた。よく意味がわからなかった。とりあえず、

「これ、上下逆じゃない？」

と指摘すると、

「うん、そうだね」

と言って、羽村聡史は、担任の教諭がおざなりに廊下に張り出しせいで上下反転していた自分のスケッチから画鋏をはずし、正しい向きに直して再び画鋏をさした。

小学3年生の羽村聡史はそんなやつだった。

クラスに喧騒が戻った。鞆に拾い集めたものをしまった羽村聡史がゆっくり歩き出す。私は友人らと放課後の予定を話すフリをしながら、もう一度、教室のドアを開けている羽村聡史の横顔に視線をやる。相変わらず何も感情の見えない無表情。きもい、ふてぶてしい、と言われる顔。それが羽村聡史だ。あの顔の下には、よくわからない蟻の巣があって、表からは見えない色んなものがしまっているのかもしれない。遠いところを流れている星とか、満ち欠けする月とか、希望の太陽とか、傷ついた心とか、涙とか。それが羽村聡史で。

そんな事を思いながら、幼馴染がいじめられそうになっているのに、保身に走って他人のフリをしているのが、私だ。

姫君と五人の侍

工藤伸一@ワサラー団

炎上した城を追われて命からがら逃げのび、偶然に落ち合った侍は五人。山道は二つに分かれている。どの道を進んだとしても敵陣の刺客が潜んでいるだろう。勝ち目のないことを知った殿は抵抗を諦め、武将としての誇りを保つべく討たれる前に家族ともども自害した。その場に立ち会った家臣らは、殿の親族への遺言を託された。道中で落命した者は数多くいて、もうこれ以上の犠牲を出すことは出来るだけ避けねばならなかった。

一人でも多く生き残るために一人だけ違う道を進む。連れ立った残りの四人はまた分かれ道に出会い、ここでも一人が道を選び、その後も同様にして五人は散り散りとなり目的地を目指した。いずれも既に相当の傷を負っていて、もはや戦うことは困難に思えた。けれども忠実な彼らにとって、主君の命令通り動く以外の選択肢はなかった。そしてその全員が道半ばで敗れ、主の遺志を伝える計画は潰えた、かに思われたが、そこで信じられない奇跡が起こった。その経緯を記したのが、この図である。



これを書いたのは殿と共に死んだはずの姫君だった。彼女は毒をあおって死んだふりをしていたが、それは毒物ではなく不思議な力を持つとして先祖代々に伝えられてきた魔法の酒だったのである。ならば他の家族も助けられたかもしれない。しかしその酒が効力を発するのは、殿を含め姫以外の家族らが亡くなるのと引き換えという条件付きだった。それは家族も承知の上で、姫にだけ酒を吞ませたのである。度数の高い酒ゆえ、吞んだ直後は姫自身、それを毒と信じ込んでいたこともあって、数分の間は気を失っていた。ところが一人だけ目を覚まし、毒の入っていた器が妖しい光を放っていることに気付いた。そしてその器に、それが魔法の酒であると書かれていたのである。

姫は茫然とそれを見つめていたが、自らの意思とは関係なく近くにあった筆を手に取り、紙に書きつけたのが件の図であった。その途端、筆と紙は共に巨大化した。筆は西洋の魔法使いが使うホウキのようにして姫の身体を乗せて宙に浮いた。紙は姫の身体をすっぽり覆い尽くし、その姿を誰にも見られぬよう透明化させた。そのまま城外に飛びだした姫は、裏山の上空にて動きを止め、五人の侍がそれぞれ最後の死闘を繰り広げる現場に直面した。

どうすれば良いか分からぬまま家臣の命を案じていたところ、姫を包んでいた紙が五つに分割され、それぞれの紙片が星・月・水・太陽・心臓の形状に姿を変えながら、金属質の武器として侍たちを加勢すべく、刺客どもを一網打尽にした。そして姫を乗せていた筆は六倍の大きさになり、六つに分割されて五人の侍を乗せ、武器と化していた紙は元通り柔らかくなって、家臣たちの姿を隠した。こうして姫と五人の侍は、殿の親族の待つ城へ驚くべき速さで到着し、元の筆と紙に戻ったのである。

一連の出来事を姫と侍が話してみせたところ、魔法の酒は親族の城にもあることが分かった。紙片に記された星・月・水・太陽・心臓は五人の侍の名前と符号するものであると判明したため、彼らは城の守り神として、魔法の酒や姫君と共に丁重に遇されることとなった。(了)

※作品集への掲載にあたって、誤字等を一部修正しました。

別荘にて

廣川ヒロト

僕は車で山道を走っていた。向かう先は、山の頂上付近にある別荘。学生時代の友人であるヨーコから、遊びに来ないかと招待を受けたのだ。

ヨーコは金持ちである。親が資産家なのだ。

派手好きで、奔放な性格だが、嫌味なところがなくて皆から好かれていた。一部、強烈に嫌っていた連中はいたが、それでもヨーコ自身は特に気にしていないようだった。金持ち喧嘩せず、という訳なのだ。

別荘に辿り着いた。すると玄関先に、見知った面々が困惑気味に佇んでいるのが目に入った。

僕は駐車スペースに車を入れると、颯爽とした足取りで皆の元に近づいた。

月本や、星川の顔が見える。なんだか深刻な顔つきで話している。おっと、あそこにいるのは学年のマドンナだった田中マリではないか。

月本が僕に顔を向けて「よう」という感じで手を上げる。月本は、少し太っている陽気な男で、カレーが大好き。しかし今日はいつになく厳しい表情だ。

「シンゾー。遅かったじゃないか」月本が声を掛けてきた。

「ああ。ちょっと渋滞に巻き込まれてね」僕は適当に答えた。「で、こんなところで何をしてるんだ？ 何で中に入らない？」

「それが……」月本は、困惑した顔つきで言葉を濁した。

星川が「ヨーコの携帯につながらないんだ。そして玄関には鍵がかかっているし」と説明した。星川は、背の高いイケメンだ。学生時代、マリと付き合っていた、という噂がある。本当かどうかは分からない。僕とはライバル関係にあった。そう思っているのはこちらだけで、星川は何とも思っていないかもしれないが。

まあそれはいい。ヨーコの携帯に繋がらない。そしてドアに鍵がかかっている？ それは変だな。

「あれ、みてみるよ」月本は、別荘の玄関を指さした。すると、玄関の扉には一枚の張り紙が貼り付けてあった。



月本が首を傾げる。「これ、なんだと思う？」

僕は、玄関に貼り付けてある張り紙を睨み付けた。これは……。まさか……？

ややあって僕は深く頷いた。皆を振り返り。マリとちらりと目があって、僕はドギマギとした。ここは、良いところを見せるチャンスだ。

「これは暗号だ。間違いない」僕はきっぱりと言い切った。「ヨーコが僕らを試しているんだ」面白い。パーティの余興というやつだな。

「ほう」星川が見直したような顔をした。

マリは、期待に満ちた目で僕を見ている。

星川が言う。「じゃあ説明してもらおうか。俺たちはさっきから、ああでもないこうでもないと言い合っているんだ。でも答はでない」

僕は張り紙に向き直った。「簡単じゃないか。これはつまり……」僕は、頭をフル回転させた。

頭が痛くなってきた。

目を瞑る。

耳が熱くなってきた。

……ああ、駄目だ。目眩がする。

次の瞬間、目を開いた。

「この張り紙には、複数の意味が込められている。この星は、星川のことを指してる。そして、月は、月本だ。そして太陽は……マリのことだろう。マドンナだったから」

僕は振り返った。

皆は、訳が分からないといった表情で僕の顔を見返してきた。

僕は続けた。「分岐点を一つ通過すると、星に辿り着く。分岐点を三つ通過すると月本に辿り着く。そして、分岐点が四つだとマリ……」

訳が、分からない。何を書いてくれとんねん！ イヤな汗が脇の下を濡らした。

「それで？」星川が促す。

「それで……」僕は言葉に詰まる。「それで……分岐点の一つが星だから、コレはつまり夜まで待て。……ということだよ」僕は空を仰いだ。もうすぐ日が暮れる。

「そして、ハートは……。皆が心に手を当てて考える必要がある、というヨーコの示唆だろう。そして水と太陽は、この集まりの本質を表してるんだ。水と火。つまり対極……」

僕が必死に言葉を紡いでいると、外車が近づいてきた。外車は玄関の前で停車した。運転席から降りてきたのはヨーコだった。

「あら。いらっしゃい。早かったわね、みんな」

ヨーコは鍵を取り出し、無造作に玄関の鍵穴に突っ込んだ。ドアを開け「さあ、みんな入って」

月本がドアの張り紙を指さす。「これはなに？」

「これは最近、変な勧誘が多いから、それを撃退するためのタダの落書きよ。何も意味はないの。訳の分からない張り紙してれば、おかしい人と思われるかなって」ヨーコはニコッと笑うと、別荘の中に入った。

ふう。

マリや星川の、突き刺さるような視線を感じつつ、僕はパーティの時間を過ごした。

慰めてくれたのは、月本だけだった。

おわり

夜の底 ひやとい

夜中、眠れないので散歩に出かけた。
とぼとぼ歩き、やがて近所のやや大きめの公園の方へ出た。
すると。



「んっ……」

目の前にあやしい地上絵があった。

「何を意味しているんだろう……」

それは、ジャングルジムやすべり台などの遊具が固まっている場所の前の広場に書かれていた。

おおかた子どもが遊びで書いたものなのだろうが、それにしては妙に巧かった。

しばらく見ていると、似たようなものを二つ思い出した。

一つはあみだくじ、もう一つはマインドマップだった。

すっかり一時的な話題となった感のマインドマップだが、はじめて見た時、あれにもものすごく嫌悪感を覚えたものだ。

どうしてかはわからない。

なるべく拘束のない状態が好きだから、そういうものに左右されたくなかったのかもしれない。

それに比べてあみだくじは好きだ。

若いころ土方をやっていた時、朝事務所に集まったはいいものの、集まりすぎて人工（にんく）が余り、誰かがその日の仕事は諦めてもらわなければならないといったことがあった。

その場合、そこのえらい人があみだくじを作り、その日現場に行く奴を決めたのだ。

そういうとき、なぜか90%以上の確率で仕事に行けていた。

しまいには「おまえは今日はあみだにも参加するな」と言われ帰らされたこともあったりした。

そんな古きよき思い出のせいか、気が向いて下から先をたどってみた。

いきなり左に行くのは面白くないので右、次に左、そして右、左と辿った。

すると火の玉のような絵にたどり着いた。

「火の玉か？ 小野正一を思い出すな」

野球の本でしか見たことのない伝説の投手を思いながら、しばらくぼうっと絵をみた。

すると、その先の草むらの底から、いきなり、ぼわっと、白いものが浮かんだ。

幽霊か？

まだ春先なのに早いんじゃないか？

思いながら少し驚いたが、何かすぐにわかった。

草むらよりすこし遠くの方で、どこかの家がカーテンを開けていたのだった。

周りが暗かったので、目が暗闇に慣れていて、眩しかったというだけだったのだ。

火の玉の絵をみていたのとタイミングが合い、思わず口元が緩む。

まいったなあと頭を搔きながら、散歩に戻った。

投稿時刻 : 2013.04.13 23:35

最終更新 : 2013.04.13 23:41

獲得☆ 3.462

羽ばたく季節

進常 椀富

「アキラ、わたしわかった」

カオリが上機嫌で微笑みかけてきた。彼女はあどけない顔とは裏腹に、この学園始まって以来の天才と言われている。

よく課題を手伝ってもらうけど、決して答えそのものを教えてはくれない。

僕に問題の本質を理解させてくれるんだ。だから僕は彼女に頭が上がらない。

それにカオリの話は面白いし、僕の方までウキウキした気分になって彼女の話に乗ってみた。

「何がわかったの？ 天才のお話うかがいましょう」

「それでこそアキラ！」



カオリは一枚の紙を取り出した。紙には黒い線で大雑把な樹木らしいものが描かれていた。

枝の先には星やハート、月といった抽象的ともいえるシンボルが付いている。

僕には意味がわからない。

「何かの系統樹？」

「ある意味そう！ やっぱアキラは飲み込みが早いね」

放課後の教室、僕の机の上にイラストを置き、カオリはいくぶん興奮したように続ける。

「まず、一番下の線、これがカオスね。なんでもあってなんでもない原初の状態よ」

「ふ～ん？」

「そして星々が形作られた。最初の幹が出てるでしょ？」

「なるほど」

「そこから枝分かれしてハートが出てるのも意味があるの。星が形作られてから人が誕生して、心が生まれた……」

「人までの生物は無視？」

「そこよ！ 聞いて欲しかったのは！」

カオリは興奮した様子で身を乗り出してきた。

「見て！ 残りのシンボル、月、涙、そして唯一神は……」

「えっ？ 一番上って太陽じゃないの？」

カオリはちょっと気落ちしたような表情を見せて言った。

「太陽は星でしょ？ 続きを聞いて」

「う、うん……」

唯一神なんてどこから出てくるのかわからないけど、ここはカオリの話聞いておこう。

「で、残りのシンボルはみんなハートの枝から枝分かれしてるでしょ？ ここがポイント。星を月と呼ぶのも、涙を流す対象が存在するのも、唯一神が力を持ってられるのも、みんな人の心が概念を形成しているからなの！」

「ほ、ほう……」

「これがどういう意味か、わかる？」

カオリの目はいつの間にか血走っていた。僕は心を落ち着かせながら、率直な意見を述べる。

「言ってる意味はわかるけど、なぜカオリがそんな話をするのかわからない」

「まあいいわ。世界のほとんどは人の心が作っているということよ……。そこでこれ」

カオリは右手を背後に回した。衣擦れのような音がしたと思った直後、僕の左肩に大きなナタが振り下ろされていた。

目にも止まらぬ素早さで。ナタはもちろんカオリの右手に握られていた。

心理的な衝撃で、まだ痛みを感じない。

僕はろれつのまわらない舌でなんとか言った。

「な、なんで……」

カオリは凄絶な微笑みを僕に向ける。

「人を消せば、宇宙のほとんどは消えるってことよ。それがわたしの発見。じゃ、アキラ」

カオリは湿った音を立てながら、僕の肩からナタを引き上げる。

そして僕が抵抗の動きを取るよりも早く、何度もナタを振り下ろした。哄笑を上げながら。

激痛に包まれ、もう自分の身体の位置もわからず、視界は黒く失われた。

ただ彼女の悲鳴じみた叫びだけが聞こえる。

「神を殺す！ 神を殺す！ 次は星を潰す！」

それから突如、大きな翼の羽ばたきのような音が聞こえた。

僕が最後に知覚できたものはそれだった。

四つの冠と太陽の印

雨森

長年にわたる我が家の実質的権力者だった祖父が亡くなった。蒸し暑い夏の朝だった。

「親父には悪いけど俺はホッとしたよ」

通夜の後の寝ずの番で叔父が悪びれもせずに零したその言葉は僕の耳に残って離れない。大して家に寄り付きもしないような叔父さえそう言うぐらいだ。父や母の苦勞、それからの開放感は計り知れない。

思えば祖父は奇妙な人だった。僕が物心つく頃にはすでに御隠居の身分だったはずだが、毎日早朝に起き、襟を高いシャツをいつも身につけていた。性格は几帳面かつ神経質でやれ味噌汁が辛いのが甘い、テレビの音が大きいのだと大声で喚くような厄介な所があった。

僕が奇妙に思うのは両親の反応にもあった。別に祖父は大きな財産を持っているような身分ではないのに父は祖父に敬服、というより臣従しているかのように見えたのだ。その父に嫁いだ身である母も祖父の言動について釘を刺すような事は僕の記憶上一度もなかった。

祖父の葬儀は僕の想像通り寂しいものだった。現役時代にはどこかで教師をしていたと聞いたことがあるが、その縁での参列者など一人も来ず、僅かな親族演者が居並ぶだけのいたって簡素な式だった。葬儀社の人間に対して徹底して金はかけない事を言い含めていた父の姿はどこか愉悦のような影さえ見えた気がする。

男手がないからと僕が呼ばれた。何かと思えば棺を担げと父が言う。僕は祖父の事が嫌いだったから、正直言って気味が悪かった。ほとんど厭々といった態度で父や叔父らと棺を担ぎ出すと丁度雨が降ってきた。べちょりとして妙に粘っこい雨だった。

到着した火葬場は混んでいた。人口二万人程度の田舎町なのに混むほどに人が死んでいるのかと思うと不吉な心地になる。父と叔父は棺を焼き場に運びこむと早速待合室のソファでビールを呷っていた。

「なあ兄貴、これはどうする？」

叔父が煙草をくゆらせながら懐から出した紙切れに僕の目線は吸い寄せられた。ひと目では何かサッパリわからない、子供が書いた落書きにしか見えない。

「これか」

父は三杯目のビールをグラスに注いでいた。普段は殆ど酒を飲まない父が早いペースで飲んでいる。実の父が死んだのだから酒を飲んでも不思議ではない。父は三杯目を傾けると

「燃やせ」

そう鋭く言い捨てた。

「いいのか？ これは……」

「いい。燃やせ」

普段の父らしからぬ粗い口調に叔父でさえ怯んでいる様子だった。

「父さん。それ、僕にも見せてよ」

好奇心と不安に押し出されるようにして僕は叫んだ。叔父が素早い動きで僕の目から紙切れを隠そうとする。それを父の手が制した。

「見せてやれ」

父の言葉に叔父の目が細くなった。今までに見たことのない表情だった。

「…いいのか？」

「あいつは死んだんだ。そんな紙切れ、何の意味もない」

父の声は冷たいという温度を通り越していた。祖父を『あいつ』だなどと呼んだ事は一度もなかった父だ。僕は殆ど慄然としていた。

「いくらでも見ろ」

ソファから腕を伸ばして叔父が紙切れを寄越した。指でそれを摘むと雨が降っていたせいか、それはうっすらと濡れていた。



紙切れに書かれていたものはやはり落書きだった。星にハート、水滴に三日月のマークが木の枝の先に括りつけられているようにも見えたが、意味を引き出そうとする僕を拒むような無味とした描画はそれ以上のイメージを喚起してはくれなかった。

「……何なのこれ？」

失望混ざりにつぶやく僕に叔父が「けけ」と笑った。

「わからないならそれでいい」

父はそう言うのと僕の手から紙切れを引たくると叔父のライターを点け、燃やしてしまった。紙切れはゆっくりと灰皿の中で塵になっていった。

やがて僕たちは祖父の遺骨と対面した。白く小さな骨の集合となった祖父に僕は特別な感慨のひとつも持てなかった。それから時間が過ぎてゆくと僕の記憶からあの意味深な紙切れの事は忘れられていった。

紙切れにあったあの落書きの事を風呂の中で思い出したのはそれから一ヶ月が経過した夜だった。何の気なしに鏡で見た僕の肩に星のかたちをしたアザがあったのだ。

それは全ての事を一気に氷解させる切っ掛けとなった。

死んだ祖父には水滴を象ったアザが手の甲にあった。おぼろげな記憶だが幼い頃亡くなった祖母の膝には三日月のアザがあったと思う。

僕ははっきりと確信した。あの落書きは家系図だったのだ。そして家系図は僕の代で途絶えていた。それは別におかしもない未来のことなど誰にもわからないのだから。

おかしいのはあの太陽のマークだ。太陽のアザなんて誰も持っていない。父に聞いたが答えてくれなかった。父が祖父を畏れた理由、あたかも臣従するかのようには振舞わねばならなかった理由があマークにあるのではないか。僕はようやく恐ろしくなってきた。

――そして何より僕が恐ろしいのは父の尻に新しくハートのタトゥーがしてあった事だ。親父、あんた何やってんだ……。

《つながった！で賞》
ピー Part3
しゃん

(前回のおはなし。 <http://text-poi.net/vote/7/1/>)

渋谷の街はアルコールの匂いがした。

日が暮れて、ネオンがきらびやかに輝いていた。

ひどく賑やかな街だったが、タイと違うのは水の匂いがしない点だ。宇田川という地名もあるのに、渋谷には川がない。川がないのにたくさんの人がいて、店がある。妖精のピーは濁った気持ちを抱えながら、飲み屋が並ぶ路地を歩いていた。

この東方の国は、とても裕福でモノがあふれ返っているが、神や精霊を信じる人はほとんどいない。ピーに関心を示す人間も一人もいない。何人もの酔客が横を通り過ぎる路地にたたずみ、ピーは自嘲気味にほくそ笑んでいた。

うれしいとくるくる回る尻尾は黒く変色して、蛇のようにうねっていた。先端は矢じりのように尖り、禍々しい。目つきは飢えた野犬のようだった。

「あー、いたー」

振り返ると、ブーツをはいた女が嬉しそうにピーを指差していた。

「いたー、じゃねえよ。おまえ、さっきの女じゃねえか。何しに来たんだ。ハチの居場所も教えなかったくせに」

「ごめんごめん。だって君、急にぶいっといなくなっちゃうんだもん」

そんなことを言いながら、女はバッグに手を入れると、カラフルな袋を取り出した。

「なんだ、それは？ この国の菓子か？」

「そうだよ。飴ちゃんだよ、飴ちゃん。君、甘いのが好きでしょう。なんかおっかない顔をしているけど、これあげるから許して」

ブーツの女はピーの頭をなでると、包装紙に包まれた飴を二つ手の平に置いた。

「うまいな、これ。この国の飴はタイ族のより、うまい。もっとよこせ」

ピーは袋ごと奪い取ったが、女はにこやかに笑っていた。

「ねえ、君さっきはあんなに可愛かったのに、どうして今は機嫌が悪そうなの？」

「機嫌が悪い？ おまえ馬鹿か？ 妖精として生まれて数千年、今日のような屈辱を受けたのははじめてだ。おまえ、俺の耳元で恥ずかしい言葉を囁いただろう」

「くつじょくう～？ よく分からないけどさ、生きていけばいろいろあるよ。私だって、この間、すごーく意地悪された気分になったもん」

女は次々と飴をぼりぼり齧るピーを、愛おしそうに見つめていた。ピーの尻尾は次第に色が抜け、矢じりのように尖った先端も丸みを帯びていた。

「意地悪？ たとえば、どんなことだ」

「たいしたことじゃないけどさー。私、これでも小説を書いているんだよ。それでね、ある投稿サイトに参加しているの。そしたらさ、この間、この図をテーマに小説書けって言われて、卒倒しそうになっちゃったよ」

女はそう言うと、バッグから手帳を出し、不思議な図を描いた。簡素な進化樹にも見えたが、枝分かれした先には、星と月と太陽、そしてハートと涙が実っていた。



「ほお。この図をこの国の人間が描いたのか。これは誓約の図だ。これを描いた人間は、きっとタイ族の村へ来たことがあるのだろう」

訳わかんないでしょー、と苦笑いする女を前に、ピーは腕を組んだ。神も信じぬ不屈な輩ばかりと思っていたが、そうでもないのかもしれない。飴を齧りながら、ピーは尻尾をくるくると回した。

「誓約の図？ なにそれ？ だけど、そんなことどうでもいいじゃん。あんまり怒ったりしないで、楽しいこと考えようよ。飴もっとあげるから」

楽しいこと、とピーが訊き返すと、そう楽しいことだよ、と女は言った。

それもそうかもしれない、とピーも思う。そしてもう一度、手帳の図をじっくりと眺めた。

誓約の図。

それは、精霊と人間が互いの関係を認めあう時に、交わす契約書だ。「太陽、月、星」が自然を司る精霊を表し、「ハートと涙」が豊かな感情を持つ人間を意味する。それらが交わりあい、根を一つとすることを表現したものだ。

「楽しいことか。確かにそうあるべきだ。だが、この国の人々は俺の名前をなかなか憶えてくれない。俺はそれが悲しいんだ」

路上で肩を落とすピーを、女はぎゅっと抱きしめた。少し照れ臭かったが、これも誓約の形の一つなのかもしれない、とピーは思う。

「そっかー。よく分からないけど、悲しかったんだね。でも、これからは二人で楽しいこと考えようね」

「そうだな。楽しいことを考えるのも、悪くない。だがその前に、やることがある。最高神から授かったこの名を人々が口にするようにしなくては」

ピーは残りの飴をすべて口にいれ、バリバリとものすごい音を立てながら齧ると、手帳の図に手を当て、何事かをつぶやいた。

「俺はこの名が、東方の国において讃えられることに力をふるおう。この国の権力者たちよ、汝らから我が名を唱えよ！」

天に向けて指を突き立てると、ピーの元に光が降りた。

その光はピーの身体を包み込むと、オーロラのように神々しく拡散し、赤坂方面へと散っていった。

もっと飴を買ってくれ、とピーはつぶやくと、女と手をつなぎ路地の先にあるコンビニへと向かった。

光はやがて、一軒の料亭へと降り注いだ。もうピーの名前を訊き返す者はいない。

誓約はこの国においても果たされた。

(第2回てきすとぼい杯へ戻る)

<http://text-poi.net/vote/6/6/>

大樹

茶屋

進化系統樹というものがある。

いわば生き物がどのように進化してきたのか樹の枝が張るような、根が枝分かれして伸びていくような形で図に表したものだ。

大抵の場合、古いタイプの生き物ほど、枝で言えば樹の根元、根の方から見れば地面に接する幹の部分に位置し、そこから段々と色々なタイプの生物に枝分かれしていくようが描かれる。古い書物などに出てくる進化系統樹はだいたいがこのような植物、あるいは支流から本流へと川が合流していくような、そんな形で描かれていることが多い。最近では 16SRNA などの遺伝子的の乖離度合いを系統樹上の距離として具現化する手法、分子系統解析が用いられており、必ずしも木の形ではない。それはどちらかと言えば、上空から樹の枝が分岐していくのを捉えたような図、中心から枝分かれしていくタイプのものだ。

リング・ミューラーは空を眺めていた。

夜空では長く横に広がった雲が速い風に吹かれて、次々と形を変えていく。雲ひとつひとつの形状変化は激しいが、マクロ的にはある程度の形を保っているようにみえる。フラクタルではないと思う。細部は混沌としていて、全体の形とは似ていない。現在の地球環境で見られる雲の形は完全にランダムではなく、いくつかのカテゴリーに分けられている。雲もまた、地球の大気環境に淘汰され、進化しているのだろうか。地球の大気が幾らか変化すればあるいは、現在の雲は淘汰され、未来の雲は全く違う形をしているのかもしれない。

何事も、進化論的な文脈、あるいは確率論的な文脈で語るができる。残りやすいものが、残るのだ。シンプルなものも、複雑なものも、それがその環境の中で生き残る確率が高いから残るのだ。

私は生き残れなかった、とリングは心の奥で呟いた。

リングは情報学を専攻し、アブラムシの群コミュニケーションの数理モデルの研究をしていた。けれども戦争が始まり、大学に予算が回らなくなった所でリングの恩師は他大学へ去り、研究室も解散となった。生き残れなかった。

私は弱かったのだろうか？

違う。ただ、環境の激変に翻弄されたただけだ。そう、古代の恐竜のように。

ただでさえ微かにしか見えなかった希望の星は流れ去り、戦争は終わらなかった。

戦争が奪ったのはリングの夢だけではない。

恋人は兵士となると言って出て行った。そばに居て欲しかった。けれども彼は国のため、家族のため、そ

して君のためなどといってリンダを説得にかかった。だが最終的にリンダがどうしても納得しないと悟り、置き手紙を置いて去っていった。

手紙にはこう書かれていた。

『僕をまたなくともいい。お幸せに』

戦争は続く。恋人を連れ去って。ハートマークを弾丸で撃ちぬいて。

雲間に覗いた月は三日月で、ゆっくりと微笑んでいるようだった。そう、あれは前回の三日月の晩だった。

圧倒的優位に立っていたはずの軍だったが、突然本土に火の槍が降り注いだ。

大抵は都市をそれたが、それでもその爆発の被害は大きかった。原子力でも、化学兵器でも、生物兵器でもなかったが、リンダの両親を殺すには十分な威力だった。

戦争はまたしてもリンダから大切な何かを奪っていった。三日月の晩に。

もう、何もかも失ってしまったはずだ。

もう、失うものなんて無い。

雨が降る。

降り続ける。

いつまでも。

雨は好きだ。

戦争が連れてきてくれたのは雨だけだ。

だけど戦争が終わって、雨も去っていった。

結局、最後に残ったのは太陽だけだった。

進化というものは残酷だ。

数えきれないほどの死体の山の上に生きる、たった一本の木だ。

けれども、枝からこぼれた葉や果実、花はまた木を育てる養分になるだろう。

例えば炎で木が焼かれてしまったとしても、枝が一本でも残っていれば進化という大樹は生き残り、その枝を伸ばし、分岐させる。



そう。

たったひとつでも何かが残っていればいい。

きっとリンダは一本の枝を伸ばし、いくつもの枝を分岐させていくだろう。

いくつもの形。

いくつもの何かを、リンダは手に入れ、失い、また手に入れていくのだ。

だからこんどは、太陽から始めよう。

了

《お前が主役で賞》
麦樹で乾杯
太友 豪

お前の暮らす家にはたばこの匂いが染みついている。

そのたばこの匂いが変わっていったのは、お前が中学に通い始めてすぐのことだった。

お前が十四歳になった夜。お前は熱を持つほほを押さえて、庭で息を押し殺していた。

窓ガラスの向こうで聞こえていた、いろいろなものを壊す音がやんだことを確かめてから、お前は裸足のまま家を抜け出す。

家に染みついたたばこの匂いが自分自身にもまとわりついているように感じられて、余計にほほが熱くなった。

お前の家の向かい、倉庫ビルの一階に設置された自動販売機がぼんやりとあたりを照らしている。

今夜は曇っているのか、空には月も星も見えない。雲の一部分が、地上の光を受けてぼんやりと照らされている。

アスファルトの冷たさが容赦なく足を刺す。靴も履かずに外をうろついている自分が急に恥ずかしくなってお前は少しだけ涙ぐむ。

泣くな、楽しくなれ、笑えといわれ殴られ続けた日々は、お前から泣くということをやめた。

お前のうちから歩いてすぐの所に、電車が走行するための線路を背負ったトンネルがある。そのトンネルの横には、物々しい南京錠で入り口を施錠した金属製の階段がある。

その階段はおそらく、鉄道会社の係員が線路や設備を点検するためのものなのだろう。

お前はいやな匂いのするツタの絡まった緑色に塗装された金属の門扉を乗り越える。

まだ終電には早い。

お前はさびだらけの金属のステップを上がっていく。錆が足の裏に突き刺さってくるようで不快だ。

お前は踊り場で二本の電車をやり過ぎてから、ようやく線路の上に立つ。

遙か遠くの電車の前照灯には星を

近づきつつある電車の前照灯には月を

轟音が身体を叩くかのように近づいた電車の前照灯には太陽を

涙と鼻水があふれて、お前は階段を転がり落ちた。

鼻水と一緒にあふれる鼻血をぬぐってお前は自分が超えた門扉を再び超えて逃げ出した。



のろまな時のひと打ちに、瓶ビールをつぎ合いながらタンドリーチキンの骨で塔を作りながらこの話を聞く／いうのは何回目だろう。

のろまな時のひと打ちのほら話。

投稿時刻 : 2013.04.13 23:30

最終更新 : 2013.04.14 12:13

獲得☆ 3.333

神のお告げ

山本アヒコ

その昔、聖光教という宗教が生まれた。
広めたのは第一聖人アグリアパ。彼は山の上で神の啓示を受けたという。
神は太陽の光とともに地上へ降り立ち、アグリアパへ言った。

『光当たる場所へ水を流せ。夜には月明かりが満ち、命が注がれるだろう。そこは夜にも星明りが灯される場所となる』

アグリアパは荒野に川を作った。すると自然に人は集まり、やがて大きな都市ができた。
都市の名前は第一都市アグリ。第一聖人アグリアパが作り上げた街という意味であり、聖光教が最初に作り上げた都市という意味でもある。
聖光教信者にとっては誇らしさとともに前者の意味で知られているが、聖光教を信じない者たちには皮肉とともに後者のほうが知られている。



聖光教のシンボルである図形が描かれた盾を構える集団が整列している。
横二十人、縦十人の長方形。それが何十個も平原に並ぶ光景は壮観とっていい。しかし彼らの顔色は悪く、ブルブルと全身を震わせている者もいる。
仕方がないことかもしれない。彼らはこれから殺し合いをするのだから。

平原の向こうに影が見える。視力が良い者ならどんな姿をしているのか見える距離だ。

それは騎士たちだった。

銀色に光る鎧で全身を包み、腰には剣を垂らし、手には長い槍を持っている。馬に乗った堂々たるその姿は、まさに歴戦の騎士だ。

それに比べると聖光教の盾を持つ彼らの装備はあまりにも貧相だった。盾だけは重厚な鉄製ののだが、その他はあまりにひどい。

鎧を着ている者は誰もいなかった。革の胸当てをしているのは良いほうで、ほとんどが粗末な布でできた服を着ているだけだ。兜もなく、穴が開いた鍋をかぶっていたりする。武器も剣ではなく、農作業で使う鍬や、ナイフを木の棒にくくりつけた槍だ。

さらには人数も違う。騎士たちは平原の横幅いっぱいに広がっているのに、こちらは平原の四分の一程度だ。集団の奥行きも相手の半分程度。これではどうやっても勝てるはずがなかった。

数百人の人間を殺し尽くした後、騎士たちは彼らが守っていた第五都市スリウラを蹂躪した。

騎士たちの歩みはそれで終わらなかった。第四都市ハル、第三都市ガリオット、第二都市ウオルルアンを次々と滅ぼしていく。

それはまるで聖光教のシンボルを下から消し去っていくようだった。

近づいてくる大軍の足音に怯えるかのように蹲っていた男、第八十七聖人アグリルムは叫ぶ。

おお、神よ！ なぜ私たちを救ってくれぬ！

すると室内だというのに光が降り注ぎ、神が現れた。

滂沱の涙を流しながらアグリルムは叫ぶ。

神よ！ 我らをお助けください！

神は言った。

『私は謝らねばならない』

アグリルムは、それはどうしてですかと聞いた。

神は本当に申し訳なさそうに答えた。

『言葉を伝える者を間違えたのだ。今からここへ来る者こそが、最初の言葉を伝えるべき者だったのだ』

戦いの始まり

たきてあまひか

見た感じは太った猫のようにも思える。ただそれにしても、やけにしっぽがふさふさした生き物が目の前にいる。耳が柔らかく足れているのも、猫らしくない。何より、こいつは言葉をしゃべった。

「ようやく見つけた。陽光を司る者、日輪の聖者」

何を言っているのか全くわからない。

「日下くん。日下陽介くん。君にお願いがあって、ボクはやってきた」

「なぜ、俺の名前を知ってるんだ」

「調べたからさ」

「調べたって、なんでだよ」

「君のことが必要だったから」

じっとこちらを見つめると、その生き物は小首をかしげた。

「封印された記憶は、そう簡単には戻らないか。まあいいや。なんとでもなる。

とりあえず自己紹介をさせてほしい。ボクのなまえは三夜吾、よろしく頼むよ」

そして、窓の外に目をやる。

「な、なんだよ……」

「幸い、力の封印は一部解けているようだね。ほら、窓の向こうをご覧よ。感じるだろう？」

「何がだよ？わからないよ!？」

外からぞわぞわと黒い気配を感じていた。だけどそれを感じていることを認めたくはなかった。安穏とした日常から、切り離されてしまうような予感が有った。

生き物が何かを言おうと口を動かした。

おそらく……その声が自分の耳に届くよりも素早く、俺は身を臥せた。

「ぐっ」

同時に窓ガラスが割れ、部屋の奥の机がはじけた。飛び道具か？ 机はバラバラにくだけた状態で、湯気を立てて濡れていた。

俺はほとんど意識せずに部屋を飛び出した。家の奥に逃げ込むのではなく、玄関から外へ出ようと思ったのだ。建物の中では自由に身動きができない。

「大丈夫かい」

三夜吾が追ってくる。

「なんなんだ！」

「戦いだよ！古き預言に記された、戦いの日が来たんだ」

この国を形作った神々による、千年に一度の組み替えの戦いが始まるのだという。その戦いを制した神が、次の千年のこの国を司ることになる。

「その戦いにおいて、日輪の神の力の代行者となるのが、君だよ」

「心当たり、ねえなあっ」

町を駆け抜け、とんでくる攻撃をかわしながら、三夜吾に対して叫ぶ。

「人違いじゃないのか！」

「それだけ人間離れた身のこなしをしながら、よく言うよ」

かどをいくつも曲がり、なるべく人気のない方へと逃げる。このまますすめば森林公園だ。まずはあそこに……。

「ストップ。回り込ませてもらったわよ」

目の前に人影が現れた。その人物の足下にも、小さな生き物。

「決められた手順の通り、あなたに勝負を挑ませてもらうわ」

俺は自分の足下にいる三夜吾に問いかけた。あれが、なのか？

「清流の神の代行者は少女だったみたいだね。君が最初に戦うあいてだ」

「最初？」

「そうだよ。君は4人に勝ってもらう。預言の通りに」

「預言てなんだよ」

自分がどんな表情になっているか、自分でわからない。ただ三夜吾がうっすら微笑んでいるのはわかった。

「清流、月光、誠心、新星、4つの神が遣わす4人の戦士。君には、勝ち抜いてもらわなければ」



寒い四月の夜に

ひこ・ひこたろう

私の父は日本に住むことには反対だったのだ。

しかし、中国残留孤児である母が祖国に帰る際、医者としての中国での生活を捨ててまで日本に来たのは、それだけ母のことを愛していたからではなかろうか。

日本に来てからの父は、医師としてのプライドから普通の職業に就こうとはせず、日本語もろくに勉強しないで昼間から飲んだくれていた。

生計は料理屋でパートで働く母の収入と、国から出るわずかな補助金で成り立っていた。

私は今まで好きだった父の墮落ぶりに戸惑ったものの、どうすることもできず勉強に没頭することで気を紛らわせていた。

日本語にハンデのあった私は、数学や理科の勉強では他の生徒に負けないよう努力したつもりだ。

そのおかげで大学は医学部に進むことができた。

父は私が医師の道を進むことを知り、喜ぶどころかさらに酒を飲むようになった。

私のなけなしの奨学金まで父の飲み代に消えることがあった。

そんな父が病気で入院したのは帰国して六年目のことであった。

日本語が話せない父のために、私は通訳を買ってでた。

私はまだ医学生だったが解剖学ぐらいは終えていたため、何とか通訳を務めることが可能だった。

ところがそれは同時に父の病状が芳しくないことを自分で知る結果にもつながった。

父はもうじき死ぬのだ、と確信せずにはいられなかった。

窓の外に星と月とが輝くある夜のこと、「日本語が勉強したい」と父が言い始めた。

どういう風の吹き回しなのだろうか、私は訝しく思いながらも父のための教科書などを用意した。

父の入院生活と日本語の勉強は続いた。

「お医者さんや看護婦さんに日本語でお礼をしたいな」と父がつぶやく。

「だってこれだけの設備で闘病ができるのだ。私は日本で入院できて嬉しいよ。勉強の時間もたくさんある」

「そんなこと言わないで早く退院しようよ」

「無理だな」と父は断言した「こう見えても俺は医者だ」

その力ないことばに私の心は涙で濡れた。



それから数日して、父は色々な人に日本語でたくさんのお礼を言い募った後で静かに死んでいった。
入院した当初とは違って、最後は多くの人に愛されていたように思う。
波乱だった父の人生が幸せだったかどうかは私にはわからない。
しかし、日本語を話している時の父の笑顔は、眩しい太陽のようでとても輝いていた。

投稿時刻 : 2013.04.13 23:30

最終更新 : 2013.04.13 23:44

獲得☆ 3.077

古代から貴女へ

げん@姐さん

工事現場から、古代遺跡の欠片と思われるものが発見された。

朝のニュース、新聞で報道されていたのはみたけれどどれも小ネタ、三面記事程度の扱いだっただ。

それが今、わたしの目の前にあるなんて信じられない。

うちのゼミの教授はその筋では著名なセンセーらしいけど、ふつーのおじいちゃんにしか見えない。

丸い眼鏡の某フライドチキンのおじいちゃんにそっくりで、講義もゼミも楽に単位がとれることで有名。

でも今日は見慣れないスーツの人たちに囲まれて、いつもよりずーっと厳しい顔をしていた。

聞き耳を最大限立てて分かったのは、ニュースでいった遺跡の欠片が今ここにあること。発掘されたのは、いくつもの偶然が重なり奇跡的に原型を保っていた…多分紙のようなものであること。

専門用語が出てくると、ゼミでも全然真面目に勉強してないわたしにはわからない。

新しい象形文字かもしれない。文書として機能していたのかもーなんて会話が聞こえてきたら、実物見たくなるよね？

センセーのデスクに近づくために、いつもは淹れないお茶を持って恐る恐る近寄ろうとしたら、やっぱりスーツに止められたけど、センセーが笑って手招きしてくれた。

さすがセンセー。お茶を置つつチラ見してみた…けど…



…………これが新しい象形文字？

こんな大勢おっさんが集まって、真面目な顔してなに言ってんの？

堪えきれずに笑ってしまったら、スーツのおっさんに同じタイミングで睨まれてしまった。

ううコワイコワイ。

「でもこんなの文字じゃないのに…」

そそくさと去り際に呟いたら聞きとがめられてまた睨まれる羽目になった。

スーツ集団のボスがわたしに言う。

「お前に何が分かるんだ。分かるなら説明してみろ」

お望みとあらば、やりましょう。

わたしは意気揚々と語り始める。

「これ地図でしょ？ここからこっちにいくと恋人の家。こっちは水場でー」

「ちょっと待て」

言ってみろって言うから言ってるのに何よ…

「じゃあこの太陽やら星やらは何だ」

「え？太陽は憧れってゆーか気になってる人の家で、月は二股かけてるオトコでしょ、それで星はいちばんの親友の家」

どーだ参ったか。

そう思ったのに、わたしはスーツ集団のボスに「子どもの遊びじゃないんだ」ってこってり絞られてしまった。

結局分からずじまいでスーツ集団は帰っていった。

後からセンセーに「何でそう思ったの？」って聞かれたけど、当たり前だよね？

イマドキみんなメールはカレシに見られてもいいように、暗号にしとくものじゃん。

「ナントカ先輩はどうなの？」

「えーべつになんともー(月の絵文字)」

みたいにしとけば、メール見られても二股がバレない。

そんな単純なことがわかんないなんて大人ってゆーかオトコってバカだなー

…真相は今も時の狭間に。

選択

ウツミ

――人は自分の選択をどこまで信じられるだろうか。
――自分の意思を、どこまで持ち続けて居られるだろうか。
何を選ぼうと、あるいは“何も選ばない”を選ぼうとも、時間は残酷に前へ前へと進んでいく。
在り得たかもしれない未来も、希望も、すべて過去へと押し流していく。



もしもあの時、別の選択をしていたなら。
もしもあの時、こうなると知っていたなら。
後悔は止め処なく、しかし過去へは戻れない。
いつだって我々は、不確定な情報のみを手未来を選ばねばならない。
あるいは、それが未来の選択である事にすら気付けない。
そして選んだ先に待ち受けるものは、さらなる選択。
選ぶという事は、それ以外を選ばないという事。
たった一つの未来のために、他の希望を握り潰すという作業。
未来は残酷な選択に満ちている。
過去は在り得たはずの未来の墓標で埋まっている。
それでも我々は、その瞬間の意思だけを胸に、選ばなければならない。
だが、選んだ先で。望んだはずの未来のその先で。
――人は自分の選択をどこまで信じられるだろうか。

——自分の意思を、どこまで持ち続けて居られるだろうか。

過去は変えられない。でも未来は選べる。

ならば、少しでもより良い未来へ。

後悔を教訓へと変えて、もっと前へと。

たとえ辛く苦しい選択であろうとも、それは確かにあなたが勝ち取った選択肢なのだから。

多くの希望の中から、あなたが掴み取った未来なのだから。

苦い過去は常にあなたと共に在る。

でもそれは、決して無駄なんかじゃない。

より良い未来を選び取るための、あなただけの力だから。

さあ、数々の選択と後悔の果てに。

あなたの意思が選び取るものは、何——？

投稿時刻 : 2013.04.14 00:08

獲得☆ 3.400

※制限時間後に投稿

雨女と晴れ男

永坂暖日

「……何、これ？」

わたしはある日、物書き友人に一枚の絵を見せられた。



「創作意欲を刺激するためのプロットを考えてみたの」

「プロットって……どれ？」

怪訝な顔で尋ねたものの、答えはなんとなく分かっていた。

「これ」

予想通り、友人は件の絵を指さす。

プロットは文章で書くものと思っていたわたしにとって、斬新すぎるプロットだ。というか、どれが一体何を意味してどういう話になるのか、さっぱり分からない。

それを思った通り友人に言うと、

「描いた時は『いける！』って思ったんだけど、日を追うごとに細部を忘れてきちゃって」

「ちょっと」

「だからね、とりあえず覚えている範囲で忘れたところは新たな想像で補いつつ、書いてみたのよ」

そう言って、友人はコピー用紙を鞆から引っ張り出した。

差し出されたそれを受け取り、目を通す。タイトルは――

『雨女と晴れ男』

昼に見た天気予報では、夜までの降水確率は 20 % だった。

しかし、この雨である。

晴天で乾いていたアスファルトはたちまち黒く色を変え、あちらこちらに水溜まりをつくる。そこには大きな波紋がいくつも生まれて重なり合って、少しずつ水の領域を広げていく。

それに加勢するかのように、彼は水を蹴散らした。わざとではない。避けられる分は避けるが、避けた先にもあるからどうしようもない。

突然の雨と 20 % という降水確率だったので、傘は持っていなかった。そうなる必然、雨宿りできる場所を探して歩くことになる。手持ちのビジネスバッグで少しでも雨を遮ろうとする。今日は重要な書類が入ってなくて良かったが、それでも中まで水が染み込むのは嫌だった。

ようやく、雨宿りできそうな軒先を見つけた。シャッターが降りた商店の店先で、先客はいない。彼はそこに駆け込むと、ふうと息を吐く。

紺に近い色の生地だから見た目には分かりづらいが、肩やズボンの裾はすっかり濡れている。バッグを犠牲に雨を避けた割りに、濡れていないのは髪の毛くらいだ。

中に入れてあるハンカチの無事を祈りながら取り出そうとした時、水音を聞いた。雨が地面を打つ音よりももっと大きい、しかし彼が水を蹴散らしていた時よりはずっと小さい――要するに、歩いている人が立てるような水音を。

見れば、彼とそう変わらない年頃の女性が、傘もささずに歩いていた。緩やかにウェーブする長い髪がすっかり濡れている。雨が降り出した時から、彼女は慌てることもなく歩いていたのだろうと伺わせた。うつむいて歩いているから彼のいる軒下を見つけられないのか、それとももとより探すつもりがないからあんなに濡れているのか。あるいは、あそこまで濡れたら今更雨宿りしたところで意味はないと思っているからなのか。

いずれにせよ、土砂降りに近い雨の中傘もなく歩く姿は近寄りがたく、声もかけづらかった。

「風邪引きますよ」

変わった女だと思ったのに、目の前を通り過ぎようとしていた彼女に声をかけたのは――うつむいている横顔が泣いていたからだ。

髪の毛から滴る雫と頬を直接打つ雨で彼女の顔はすっかり濡れているが、そこには涙も混ざっているに違いない。そういう表情をしていたのだ。

「……いいんです」

ゆっくりと顔を上げ、こちらを向く。胡乱な目は赤く、やはり泣いているのだと分かった。

「良くないですよ」

ずぶ濡れで見ず知らずの女なのに、彼は雨の中に戻ってその手を取った。抵抗されるかと思ったが、存外女はすんなり手を引かれて軒先に入る。

「これ、使っていいですよ」

バッグの中身は無事だった。ハンカチを差し出すと、彼女は小さな声で「ありがとうございます」と言って受け取る。

「……どうして、構ったんですか」しかし彼女はハンカチを握り締めたまま、濡れた顔を拭おうとしない。

「赤の他人なのに」

「あなたが泣いていたからです。――あ、別に恰好つきたいとか思って、そう言ってるわけじゃないですよ？ 泣いてる女性には弱いんです、僕」

彼のやや慌てた口調に、女性はかすかにではあるが表情を弛めた。

「優しいんですね」

「男はみんな、女性の涙に弱いんです」

「……わたしの彼は、そんなことない——いえ、なかったです。泣くのは鬱陶しいって、不機嫌な顔をして言う人でした」

彼女は握り締めたハンカチを見つめる。さっき綻んだはずの表情が、あっという間に沈痛なものに戻ってしまった。

「でした？」

「ふられました。つい、さっき。雨が降り始めたくらいに。わたしがすぐ泣くから、それが嫌になるって言うって」

表情が歪んで見えるのは、悲しいはずなのに無理に笑おうとしているからだだった。

「わたし、雨女なんです。彼とどこかへ出かけようとすると雨になることが多くて。どこまで本気で言っていたのか分からないけど、彼はそれも嫌だったって——すみません、いきなりこんな話。迷惑ですよ」

「……僕は、晴れ男ですよ」

「え？」

「子供の頃から、遠足とか旅行とかは、必ず晴れてました。家族や友達にも良く、お前は晴れ男だと言われてて。今も、僕は基本内勤なんですけど、たまの外勤で外に出る時は大概晴れてます。今日は、たまたま雨ですけど」

話はそこまでだった。

「太陽が晴れ男で、この雫の絵が雨女ってわけね。それが出会うのが線で示されていて……あとは、どうなるの？」

ハートマークは、たぶん恋愛を意味するんだろうけれど、月と星は？ それに、それぞれを繋ぐ線はどういうストーリーになるのだろう。

「えっとね、雨が上がる頃には夜になっていて、それまでに二人がいい感じになっているわけよ。そんでもって、そこから二人の付き合いが始まりまして、何度も同じ夜を過ごして幾星霜……」

「はじめから、それを文章にすればいいんじゃないの？ 絵でプロットって、ダイニングメッセージより難解でしょ」

「いつもと違うことすればいい練習になると思ったんだけどなあ」

「練習になってるの？ この小説も書きかけなのに」

「それは言わないでっ」

そんなことをして許される歳でもあるまいに、友人は両の耳に手を当てて、いやいやというポーズをした。

プロットは、絵より文章の方がいい。

そんなことを感じたところ屋下がりであった。

投稿時刻 : 2013.04.14 00:45

獲得☆ 4.077

※制限時間後に投稿

《一時間が 120 分だったらよかったのに賞》

世界のはて

住谷 ねこ

「ありがとうございます」

そうって 優子ちゃんのお母さんは
丁寧に頭を下げた。

優子ちゃんは昨日 亡くなった。
小児癌で 小さな体でずいぶん頑張ったが
長時間の手術に耐え切れず
たった7才の短い生涯を終えた。

担当の小さな患者が亡くなるのは
何も初めてではない。
前は外科にいたので
交通事故や、暴力によって
亡くなる子供たちをたくさん見た。

子供だろうと 大人だろうと
人間は 死ぬのだ。

比較的明るいと思われる産婦人科にいたって
死に出会うことは避けられない。

病院なんだから それはしかたがない。

なるべく 親しくならないように
あまり感情移入しないように

気をつけて気をつけて

だけど 優子ちゃんとは不覚にも
つい 親しくなってしまった。

手術の日取りが決まった日
いつも 看護師を困らせたりすることのない
優子ちゃんが珍しく消灯時間が過ぎても
寝ようとせず、注意をしに行くと
絵を描いていた。



「上手ねえ 木？」

「うん。 木。 木だけど地図なの」

「地図なの？」

「大事な地図なの」

それは病院からみての地図で
左にいくと ☆。

星のところには プラネタリウムがあって
お父さんが何度か連れて行ってくれたところ。

月のところは 学校。
優子ちゃんが通う 月見が丘小学校。
2年生になってからはあまり通えなかったけど。

あーなるほど
確かに これは地図だ。
おおざっぱではあるけれど
このとおりに進むと プラネタリウムも学校もある。

うれしそうな優子ちゃんの話に
私ものめりこんでしまった。

「このしずくみたいなのは？
しずくじゃないのかしら… えーと
このあたりには何があったかしら」

優子ちゃんは面白そうに笑って
でも少し恥ずかしそうに
「これは しずくじゃないよ 肉まんなの」

「肉まん？」

「うん。コンビニの肉まん」

ああ そうか うんうん。
確かにあるね。 コンビニ。

「初めて食べたんだ。 肉まん。
吐いちゃったけどさ」

「それでこのお日様のところは 公園
おとうさんと おかあさんと
お弁当もって 何回か行ったの
春にはたくさん花が咲くの」

「うん」

「また 行くんだ」

「うん…… さあ もう寝ないと」

これは 優子ちゃんの好きな場所に行くための
地図だ。 まだ幼い優子ちゃんの
知ってる限りの狭い だけど すべての地図だ。

息苦しくて とても見ていられなくなって
私は最後のハートマークを聞かずに逃げ出した。

そして この絵のことは
ベッドを片付ける時にマットの下から出てくるまで
忘れていた。

優子ちゃんのおかあさんは
いとおしそうに絵をなでながら
私の地図の説明を うなづきながら聞いていた。

「ハートのところは……
すみません。 聞いてないんです」

「いいんです。わかりましたから
ここは 仲良くしてくれていた祐樹君の家なんです」

※作品集への掲載にあたって、誤字等を一部修正しました。

投稿時刻 : 2013.04.15 11:22

最終更新 : 2013.04.15 14:16

獲得☆ 3.556

※制限時間後に投稿

処方箋

肉まん大王

「じゃあ、このハートは何？」

「ハートはあんただよ。」

「わたし？」

「そう。」

「…わたしの？ …、心臓？ …？」

「そうじゃないよ。」

「えっ でもハートは心臓のマークでしょ？」

「そうだけど …この場合はちょっと違うんだよ。」

「えっ でもじゃあ …何？」

「心だよ。」



医者がくれた紙には、
木のようなものが落描きしてあるだけだった。

ばあちゃんを見てくれる医者はずぐ近所だ。
だが、この妙な処方箋の薬は、
電車で1時間以上も離れた大陸側のこの町の、
この店でしか扱わないらしい。

はあちゃんに頼まれて、ルルエはおつかいに来た。
ばあちゃんのご事は好きだ。お使いの駄賃も必ずくれる。

大陸側に遡る深線は、
4歳の頃に父母と一緒に乗って以来、2度目。

高層ビルの路地や屋上が遊び場のルルエにとって、
地上を走る電車は特別だ。
スレスレを駆け抜ける電柱や、絵の具のように流れる草原や
線路と並走する川面を、飽きもせず眺めていた。

終点の駅は、
くすんだ白い壁の飾り気の無い建物で、
改札の前とホームの奥に一人ずつ、
銃を持った薄茶色の制服の見張りが立っていた。

駅を一步出てみたこの町は、ルルエの街とまるで違う。
今出た駅舎が一番高い建物で、あとはみな平屋で、
たまに2階らしきものやベランダのようなものが、
オマケのように付いている。

舗装されていない広い道は、
人通りは多かったが、静かだった。

駅から出た人は、それぞれの目的の場所へ
黙々と向かってゆく。

ルルエも、まっすぐ薬店に向かった。
途中、目を惹くものは多かったが、用心深く、迷わないように歩いた。

薬店のおじさんは、興味本位の質問に丁寧に答えてくれた。

- ・星や月、水といった記号は、何がどの程度の割合なのかを示している
- ・木の枝のような線は、脈に至る経路や順序を示している

「私らはそれを見て、いろんなものをちよつとずつ混ぜて、薬にするんだ。」

「…心って、どうやって薬に混ぜるの？」

自分が奇妙な機械に取り付けられて、
胸のあたりから何かを抽出されている図を想像したルルエは
ちよつとまゆをひそめる。

「もう入ってるんだよ。」

「えっ」

「…あんたが薬をもらいにここまできてくれた。」

「そういうことが、もうこの中に入っているんだよ。」

「・・・」

わかったような、わからないような気持ちで、
駅へと戻る埃っぽい道を急いだ。

改札で、銃を持った見張りの顔をちらと見ると、
向こうもこちらを見て一瞬目があつた。
ルルエとそう歳の違わない、若い男だった。

帰りの電車は8割方の席が埋まっていた。
みな大きな荷物をかかえている。

「元は同じ。生きているものも、そうでないものも。」

薬店で聞いた言葉が頭に浮かぶ。

反対の窓から陽が差してくる。
もう3時か4時くらいだろうか。

「明るいうちに帰っておいで」、という
ばあちゃんのことを思い出した。

終わりに

てきすとぼい杯、第4回となります今回は、お題が挿絵、ということで、開催前には若干の不安を抱いておりましたが（……そして、お題公開直後の皆さまの反応から、投稿数の激減も覚悟しておりましたが）、蓋を開けてみれば過去最多の21作品・21作者様にご参加いただき、これまでで一番の盛り上がりとなりました。

抽象的なお題の解釈から、多様なジャンル・作風の作品をお寄せいただいたこと、また、挿絵と文章が互いに影響し合うという、新しい小説創作の可能性が感じられたことなど、非常に収穫の多い回となったように感じています。

……ただひとつ、審査終盤に、各作品に大量の不正票が投じられ、投票順位が混乱し、調査と再集計のために結果発表を延期させていただいたこと、非常に残念でもあり、ご参加の皆さまには大変申し訳なく思っております。

不正票の完全な対策は技術的に難しい所もあるのですが、今後、少しでもこのようなことが起こり難くなるよう、てきすとぼいの仕組みを少しずつ見直していきたいと考えております。

最後になりますが、今回もたくさんの方に、作品・投票・感想などへご参加いただき、また度重なる結果発表の延期にもお付き合いいただきまして、誠にありがとうございました。

至らぬ所も多いサイトではございますが、よろしければまたぜひ、次回以降のてきすとぼい杯や てきすとぼいで開催される他のイベントにもご参加くださいませ。

2013年5月7日
てきすとぼい杯 運営担当

※なお、次回てきすとぼい杯は、2013年5月17日(金)開催の予定であります。

てきすとぽい杯作品集
〈第4回〉

<http://p.booklog.jp/book/71105>

編集まとめ : てきすとぽい

<http://text-poi.net/>

てきすとぽいプロフィール

<http://p.booklog.jp/users/textpoi/profile>

表紙デザイン : 蟹川森子

てきすとぽい杯コピー : 茶屋休石

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/71105>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/71105>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパブー

<http://p.booklog.jp/>

運営会社 : 株式会社ブクログ



てきすとぼい杯

